
世界と狐っ子

白い狐が好きです

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界と狐っ子

【Zマーク】

Z4994M

【作者名】

白い狐が好きです

【あらすじ】

神様達の暇つぶしにつきあって転生したのはいいんだけど……女になってるし、狐っ子だし、さらに約束で原作開始まで生きないとにされてしまつてのにエヴァが生まれるより約3000年も前つてどういうことですか！？

1、原作開始約3000年前ですか

右も左も、ちらりと見え木だけで空さえほとんど見えない森の中にぽつんといた人影から

「エリは、エリですか―――――!?

静かな森の中に、虚しい叫びだけが響きわたった……

・
・
・

やあ！　俺はわざとまで亡者の列に並んでいたはずなんだが気がついたら変なじじいがいる真っ白な部屋にいたぜ』

「手早く済ませたいのでじや、わざと戻つてきてもらえんかの？』

「つと、悪いなじいさん余りにも突然すぎてついでいけなかつたぜ』

「それでじや、わし等の暇つぶしつきあつてもうつてかまわんぬかの？』

「転生だっけ？』

「そうじや、ちなみにお主に行つてもうつ世界は魔法先生ネギまーでの、既に9人ほど送つていてのお主で最後なのじや』

「ネギまか～～……つて9人多ー！」

「仕方ないのじや、わしら神が面白くしてもらおうと力を与えても、所詮は元一般人じやから行つた瞬間死んでしまつたり、力に飲み込まれて自滅してしまう者が後を絶たなくての……それでじや、世界が受け入れられる限界の人数を最初から送り込んでしまえば生き残れる可能性が高いだろ？ってわけじや」

「ふうん、まあいいや」

「それでどうじや、わしらの暇つぶしひつきあつて転生してももうつてかまわぬかの？」

「ああいいぜ、ただいくつか質問してもいいか？」

「かまわぬ」

「くれる力の数は？」

「五つじや。但し、能力によつては2つ分以上を要求する場合もあるの」

「転生後の容姿とか、転生先の指定とかはくれる力の中にはいるのか？」

「はい、らぬな、それらは力と関係ないからの」

「力の交渉とかは可能か？」

「交渉じやと？」

「ああ、何かを諦めるとか削るとかで2つ以上本来欲しいところを一つにできるかつてことだ」

「ふむ、それならまあ…可能じやな」

「先に行つた連中がどこに行つたか教えてもらひのは可能か?」

「最後になつてしまつた餞別がわりにかまわぬ、細かくは無理じやが……原作開始約600年前に4人、大戦時に3人、原作に合わせて2人じやな」

「600年前が一番多いって……」

「口り　ンが多すぎたのじや氣にするでない……まだ、他にあるかの?」

「いや、これで十分かな?」

「それでは、お主は五つの力は何を願つのじや?」

「俺は……」

・
・
・

～～ここから冒頭に戻ります～～

「なんか声が高いし、周りは木しかないし、小さいけど胸が盛り上

がつてゐるし、わたしの大事な物が無くなつてゐるし、頭の上に耳があるし、腰あたりから尻尾見えるし、言葉もおかしいしつつあるのぢいさんなにをしてくれたのですか――――――――――――――――

もつ一度、心の底から叫ぶが虚しく森に響くだけ……

「……はあはあ、まあいいですとりあえずポケットの中に入つていた手紙を読んでみます」

いつの間にポケットの中を調べていたのかとか気にしないでください。

「ええと何々……』長く書くのも面倒じゃから簡潔に、今の姿はお主がわしに容姿をまかせていいと言つたからじや、時代はまあエヴァが生まれるより3000年くらい前じやな、場所はわしにも分からん、頼まれた道具は近くの箱の中じや、原作開始前に死んだら約束通りお主はわしのペットじやからの（雄はいやじやから雌で狐つ子萌えが最近のわしの流行じや）、3000以上前のはお主が頼んだ並行世界への移動権利を得るためにじや、後は　　p.s.　かなりわしの好みを入れさせて貰つた礼におまけもつけといつてやつたので使うといいのじや』……後はの続きが無いのはきっとめんどくさくなつたんですね、……このこの状態はわたし自身のせいでしたか』

気づいたらわたしは力が抜け膝を着き〇＼＼の姿をとつていきました。

統く？

2、狐の子には巫 服がデフォルトですね？（前書き）

主人公がしたつたらずになつたので少し読みにくいと思いますが、これはこれであります。

2、狐っ子には巫 服がテフォルトですよ?

「いつまでもこうかいしてもしかたないです、てがみにかいてあつたはこをあけてみます」

言葉が前回と違つておかしいですが、落ち着いてきたら急に舌つたらずになつてしましました。

まあ、ここにはわたししかいませんので気にせずに近くにあつた箱を開けたいとおもいます。

「なにがでるかな～ なにがでるかな～」

宝箱を開ける感じがしてたのしいです

カパツ

『パツパカパーン!』

ビクッ!!

『少女は宝箱を開けた、

手の平サイズのガラス球、

小さな指輪、

携帯食料、

赤白の服、

古ぼけた手紙、

を手に入れた!!!』

・
・
・

……本物の宝箱でしたか、おじいさんの悪戯だと思いますが、気にしないよひこしましょひ。

「うと、とりあえずひとつずつかくにんしてみましょひ。
…………どりやらでがみははいつているものとりあつかいせつめい
しょみたいですね。」

現状確認と頼んだ物の使い方が分からなかつたら意味がないですか
ら読んでみましょう。

『取り扱い説明書（b） 神様の部下）「おじいさんじゃなくてそ
のぶかさんからでしたか」 ここの度は神様達の暇潰しに付き合つて
いただきありがとうございます、本当にしたらこの説明書も神様が
書くはずだったのですが神様つてば……「ぶかさんのぐちがえい
えんとつづくのでかつとです」…………新生活応援セツトの説明～
「ここからですね」新たな生活を始めていただく転生者の皆様を少
しどもお手伝いさせていただくために少しばかりですがお役立てく
ださい（転生者ごとに入っているものが多少違いますのでこの先の
説明はあなた専用だと思つてください）。

手の平サイズのガラス球

(あなたが望まれました2つの道具のうちの一つになります。

名前はグランドアースといいます、神様印の特製品として、ステルス機能とどんな衝撃でも壊れないようになっていて、さらに、現実世界との時間の流れが現実の1時間中では1日だけでなくその逆、現実の1日を1時間にできたりします、もちろん現実との同期も可能です。中の広さですが、某真祖の吸血鬼が使っていた別荘とは別物だとお考えください、具体的にはこれは別荘ではなく一つの世界だと思っていただければ分かりやすいと思います。詳しい説明は、中に入りますのでそちらでご確認ください。中に入りたい時は、入りたいと思うだけで入れますので簡単です)

小さな指輪

(あなたが望まれました2つの道具のうちの一つになります。

神界にのみ存在する鉱石によりできた、非常に魔力伝導率の高い初心者から玄人までご用達な魔法行使用の媒体になり、長年使っていただけますよう成長に合わせて指輪の方が自動的に指のサイズに合うようになっています)

携帯食料

(いきなり新生活を始めると言われても、なかなか生活基盤の確保は難しいと思いますので1ヶ月分の食料を入れさせていただきました)

赤白の服

(ぶっちゃけ巫 服です。狐っ子はこれじゃ！っと神様の趣味丸出しの一品になります。見た目こそ普通の 女服ですがそこは神様印、汚れない、破れない、大きさの調整が可能な上、耐魔・耐物まで備えた万能服です。但し、古くから続く下着を着けてはいけない巫 服の伝統により下着を着けることができない呪いがか

かつてぃます)

以上で新生活応援セットの説明を終わります。

続きましては～貰つた能力説明～になります（こひりせん転生者ごとに違います）。

肉体年齢操作（不老）

（無意識下では基本6歳に設定されています。最大16歳まで可能です。

契約により基本年齢を低くしています。年齢を上げて維持し続けるには気を消費し続け、寝るときは解除されて元に戻りますので注意してください）

「おじこさんとのけいやくでふつうはふたつぶんひとつよつなふろのひからを、きほんねんれいをおとして、ねんれいをあげるにはきをしようひするよつこしてせいげんをしたのでした」

限界突破

（様々な人間の限界を突破できるようになっています。
契約により最初は普通の子供以下の能力しかありません）

「！」のけこやくはもつひとつのみをもひつためです

魔導具

（お望みになられたのはエヴァンジエリン所有の別荘と、魔法発動用の指輪でしたが、神様のおもちゃ箱の中に似たようなものがあつたのでそちらを入れさせてもらいました）

「かみさまのおもちゃですか、まだせつめにしょしかよんでいませんがおもちやのじげんがちがこすぎるきがします」

解析眼（魔眼）

（様々な解析が可能な眼です。 植物の毒を調べたり、昆などの仕掛けを見破ることが可能です。 サラに副次効果で普通は見ることが出来ないものも見ることができます）

「「これはいきていくためにはみしらぬとちなどをぼつかんしたりすることもあるだろうとおもい、きけんかいひのよぼうのつもりでしたがふぐじこづかもべんりそつでらつきーです」

才能

（全ての才能を有しています。 最初は素人以下からはじまります。 成長速度が才能の無い人と変わりません。）

「「これにはくらうしました、いろいろなことができるようになります。 たかっただでさいのうをしほらずに、やることぜんぶにさいのうがあるようにしてもらいたかったのですがむりだといわれたので、けいやくをしましたがそれだけだとたりなくて、わたしのいまのすがたと、もしげんさくかいしまえにしんだらすきなようにしていいとまで、けいやくをさせられてしましました（しゃくだつたのでへいこうせかいりょこうのけんりをつけでもらいましたけど）」

以上で最後になります、それでは転生者の皆さん新しい人生をお楽しみください』

「ふう、かなりながかつたです。……いろいろとためしたいこともできましたけど、そのまえにいつまでもはだかのままでいるのはだれもみていないとはいっても、はずかしくなつてきました」

箱の中から、服を取り出して両手で広げてみます。

「あのおじいさんのしゅみはこまとうですが、かなりまごあつくて
す」

呪いつきの服らしいですけど、そもそも下着が入っていない時点で
呪い関係無しだよね。

「さつそくきてみるです。……………そういえば巫 服つてどうやつ
てきるのでしよう?」

おじいさん、着方の難しい服を入れるのでしたら、着方の説明書も
入れておいて欲しかったです……。

2、狐の子には巫 服がデフォルトですよね？（後書き）

何かここで書いておかないといけないことがあつたはずなのですが
忘れてしました。

思い出したら、どこかで書いておきます。

3、経験がなければもし力があつても生きていけないと感じます

「てんせこしたばかりなのにしゃべるのあのひんちですか」

お爺さんからの貰つた巫 服をしつくはつくながら、派手に動くと簡単にずり落ちてしまつほど不恰好ですがなんとか着られたと思つたら二つの間にか、

「 「 「グルルルルル……」「」

狼さんの群れに囲まれていました。

「じつやうせりあまで静かだつたのは、彼らの縄張りだつたからですね。

「ともおおきこです……」

「ちよつと危険?な発言ですね自重したほうがいいでしょうか?

「やつぱりね、まほふあんたジーのせかいですか、じつさこにそのせかいにきてみればもともとのせかいとまほつかんけいがいは、おなじだとおもつてこましたけど、よつんばいなのにせたげがわたしのばいこじょいわおきにおおかみさんとかふつうはいません」

このサイズの狼さんが普通にいるなら他の生き物も同じくらい大きいのでしょうか?

「いつまでも、げんじつとうひしていてもしかたがないです、いまわたしだとかてないのでわいしゅうへいきをつかわせてもらひの

です「

わたしは、先ほど手に入れたばかりのガラス球＝魔法球を手に持ち、

「はいりたいです」

言葉に出しながら、中に入れようと念じると正元から魔法陣が現れて……あれ？ 出ないです？

「どうしてですか！ これではいれるってかけてたじゃないですか！」

「「「グルルルルルル！」」」

少しずつ近づいてくる狼達。

「うひこないでください！ わたしなんてたべても……おいしいかもしぬません」

今わたしあはふにふにの6歳児ボディです、とっても柔らかくておいしいでしょ。

「ガウー！」

「あやつー！」

狼さん達のうちの1匹が襲い掛かつてきので咄嗟に横に飛んで避けたのですが、交わしきれずに狼さんの爪がわたしの右腕を掠つっていました。

……わたしでついわざ今まで男だつたのに女のトトロい声が出せるようになつてるんですね、微妙に恥ずかしいです。

「「うう……いたいです」

右腕から血が出てきました、服も破けてますし……浅かつたのか血は余り出でていないですけどつとも痛いです。

(この服って対物使用で破れたりしないはずじゃなかつたんですか！？)

「「「グルルルルルル！」」

どうやらさつきのやり取りでわたしは大した脅威では無いと分かつてしまつたみたいですね。

もひじき狼さん達は全員で襲いかかつてくると思います。

その時は、先ほどのように避けることはわたしには出来そうにないです。

「みじかいだいにのじんせいでした、このままわたしはしんでおじいさんたちのペとけつていでしようか

なんだか既に諦めムードになっていていますねわたし、年齢低下と女子になつた影響でしょうか。

『遺伝子情報の解析が完了しました。あなたをマスターと認識し起動します。』

「えつ？！」

突然、右手に痛いのを耐えながら辛うじて握っていた『血のついた魔法球』から声が聞こえ、

次の瞬間、足元から現れた魔法陣の光が私を包んでいきました。

（ちょっとだけ三人称視点）

少女を包んでいた光が収まつたそこには、一つの『血のついた魔法球』が落ちているだけ。

獲物が急に消えて困惑している狼達はなにを思ったのか魔法球を口に銜えて行ってしまいました。

消えた少女は、まさか狼達に魔法球を銜えられて運ばれていふとは考えもしないでしょう。

そして、少女も狼達もいなくなつたその場には、少女が漁つていた『箱』と、少女もその中に物を入れた神様達も気づくことが無かつた少女が怪我をした時に飛び散ったのか少女の『血がついた種』が一つ、箱の中の隅っこに残されました。

この『種』がどんな影響をこのねぎ魔の世界に与えるのか、それが分かるのは……。

3、経験がなければもし力があつても生きていけないと思ひます（後書き）

主人公のネギ魔での初戦闘でした。

主人公は将来的にチートになれるだけの力を持つていますが、今は経験と鍛錬が無いので野生の狼達（ファンタジー世界ですからこれぐらい大きいのがいてもおかしくない？）にさえあつさり追い込まれます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4994m/>

世界と狐っ子

2010年10月10日21時47分発行